

## 奄美ならではの研修 Vol.4 ～ 無人島でよか余暇 ～

大谷 泰行 (国語科), 向段 武志 (地歴公民科), 大富 将範・前村 昭人 (工業科)

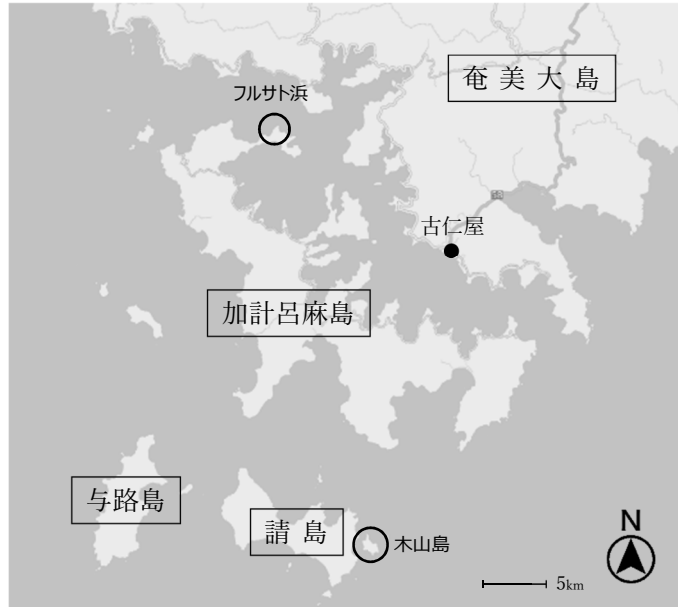
### 1 はじめに

私たち鹿児島県教職員は、県の全域において普遍的で均等な教育を実現するという理念のもと、定期的な異動によって県内各地を赴任してまわる。新任地においてよりよい授業や生徒指導を行うためには、まずその地域の地政学的観点から地域特性等の深い理解が不可欠であるが、そのためには積極的にその地域に溶け込み、主体的に活動し、校外にも積極的に赴く必要がある。特にここ奄美群島区は、地理的にも歴史的にも本土との様相の差異が大きく、一つの行政区(県)の中でこれほど異なる気候・文化を抱え持つ地域は、全国的に見ても稀有であろう。

私たち高等学校職員の奄美群島区での赴任期間は原則として四か年または五か年である

が、県本土域でのそれが七か年から八か年であることを鑑みれば、地域理解に要することのできる時間は比較的短いといってよい。加えて奄美群島は世界的にも特異な自然環境を有し、世界でもこの地域にしか生息しない多くの動植物が存在し、また歴史的にも近代において薩摩・島津の侵攻・支配を受けていたことなど、県の職員として身につけておかなければならない知見は県内の他地域のそれに比べても特別である。

2021年7月26日。奄美大島は、徳之島、沖縄島北部、および西表島とともにユネスコの世界自然遺産に登録された。島の沿革史の中でも非常に大きな転換点を現地にて迎えた者として、まずは自然環境の豊かさ、亜熱帯気候の特性等について肌身を持って理解しようと、足掛け6年目となる野外宿泊体験を企画・実施した。第5回目の研修となる今回の舞台は、加計呂麻島の北部に位置する、フルサト浜である。



本文中に登場する島嶼と研修地の位置関係

### 2 参加者紹介

#### (1) 機械電気科 大富 将範 (写真右端)

小4の夏休みに、父親のUターンに伴って大阪市から霧島市国分に泣く泣く(当時)転居。学生時代はかごしま水族館と平川動物公園にてガイドボランティア等に従事した。就職するまでにいろいろな社会を覗いておきたいと、学生時代に経験したアルバイトの職種は20を超える。現在は、奄美ネイチャーセンターの月例の自然観察会にて、植物について学ぶことが楽しみ。今年はホエー



恒例の、出発前の正門前での記念撮影

ルスイムにてザトウクジラ3頭とともに泳ぐ体験をし、頭を殴りつけられたような衝撃を受け更に世界観を変えさせられる。奄美の自然に触れたいと思ったら、まずは大畠に声をかけてみるのもよい。大学の卒論および大学院の修論のテーマは「屋久島におけるウミガメの生態に配慮した護岸養浜について」。これまでの勤務校は、福山、高山、有明、奄美。

(2) 国語科 大谷 泰行 (写真左から2番目)

伊佐市にある浄土真宗大谷派の寺の長男として生誕。跡を継ぐことも視野に入れ、京都にある仏教系の大学に進学。奄美高校に赴任して以来、奄美の自然を満喫することばかり考えている。生まれ育った大口は山ばかりであるが、父親の出身が港町の阿久根ということと、元水泳部なので、海でも十分楽しめる能力がある。京都の寺院巡りが趣味で年に一度は京都を訪れ、またやたらと苔(こけ)類に造詣がある。大学の卒論テーマは「浄土真宗における真と偽について」。これまでの勤務校は、出水工業、川内、吹上、奄美。

(3) 機械電気科 前村 昭人 (写真左端)

小学生時代に父親の転勤に伴って鹿児島県内の各地を転々とした生活に嫌気がさしたことで、野球の強い学校に行って自分の実力を試してみたかったことで、中学・高校時代は親元を離れ、都城市の叔父の家に6年間の下宿生活を送る。高校時代の夢は、教員になって高校野球の監督をすることであったが、大学4年時に教員採用試験に合格できなかった。そのまま横浜の真空ポンプメーカーの研究所に就職、設計・開発の仕事に携わる。しかし夢を諦められずに退職、教員の道に再挑戦し、今に至る。奄美高校に赴任後、その自然に魅了されて釣りにハマり、今後はもっと自然を満喫できるようなマリンスポーツにも挑戦したいと思っている。大学の卒論の研究テーマは「打撃超音波による青果物の内部品質非破壊検査法」。これまでの勤務校は、鹿屋工業、川内商工、穎娃、鹿児島工業、奄美。

(4) 地歴公民科 向段 武志 (写真右から2番目)

全国的にも名を轟かせる、志布志市志布志町志布志志布志市役所志布志支所の近隣にて育つ。大学時代は音楽関係のアルバイトに明け暮れ、その縁でLINDBERGのメンバーと草野球をしたことも思い出の一つ。奄美高校に赴任してから奄美の海に魅了され、スキューバダイビングの資格を取得。魚類や珊瑚の観賞を趣味とし、南部の大島海峡を中心にダイビングを重ねる。本来は音楽好きのインドア派だったが、この島で生活するうちに、気がつくアウトドアとの両刀使いとなった。大学の卒論テーマは「日米防衛協力のための指針改定(新ガイドライン)に関する一考察」。これまでの勤務校は、国分中央、甲陵、指宿商業、奄美。

### 3 それぞれの所感（大富の場合）

今年は、二度もフラれた。

一度目は、思い起こせば9月の、体育祭の振替休日の日。

二度目は11月の、文化祭の振替休日の日だった。

そう、我々が無人島への渡航計画を立てる度に、海の女神テティスなのか竜宮の乙姫なのかは知らないが、凶ったかのように海に強風を吹き荒らしては我々の無人島までの海路を閉ざすのである。昨年の研修は、世が未曾有のコロナ禍ということで、研修を強行して万が一にも「無人島でクラスター」という、「青い食紅」みたいな事態を発生させてしまうわけにもいかず、泣く泣く自粛してきたという経緯がある。鉄道マニアは、忙しくて鉄道を見に行けない時間が続くと「鉄分が不足する」そうだが、昨年、無人島研修を実施できなかった我々は、それに倣うと「島分」が欠乏していた状態であった。よって、今年こそは是が非でも研修を実施するため、荒天のたびに延期に延期を重ね、季節的に最後のチャンスかと思われた11月20・21日という遅い時期での実施に漕ぎつけたわけである。もとい、もはや我々には中止という概念はなかったのだから、たとえこの時期を逃したとしても冬の無人島キャンプを決行したと思われる。

しかし、蓋を開けてみればさすがは南国奄美である。先に述べれば、11月も下旬ということまで心配された寒さは杞憂に終わり、結果としては長袖一枚に短パンという組み合わせでも少し汗ばむくらいで、夜に至っても寒さを感じることなく、むしろキャンプを楽しむ上では最高のコンディションであった。今回の研修で学習した結論のうちの一つを冒頭から述べれば、キャンプは夏ではなく秋に行くものである（いや、それが普通かもしれぬ）。

今年度の参加者は、四人。一人は古参で無人島三度目となる大谷。あとの二人は、初参加で無人島デビューとなる、前村と向段である。と、ここで困った場面に遭遇してしまった。実は足掛け6年の歳月を費やして研鑽を積んできた無人島研修であったが、実は偶然にも(?) これまで参加者の全てが自分よりも年下ばかりであった。そのため、本紀要にもさもありなんとばかりに“呼び捨て”で登場させてきたのだが、この前村と向段は自分よりも年上、つまり先輩方なのである（ともう、すでに呼び捨て表記してしまっているのだが）。いくら二人が無人島未経験者とはいえ、ここは芸能の世界ではない。この世界では自分が先だと先輩風を吹かせて呼び捨てにしては不躰だし、「さん」付けすると何やら硬い感じになってしまう。むろん、我々の間にそのような硬い感じは皆無であるし、二人もそれは望んでいない（と思われる）。思案の結果、前村と向段の二人は、前さん、段さんと書くことに決めた（ちなみに、本人たちを前にしてそう呼んだことはない）。

今年度の目的地は、瀬戸内町は請島の南東に浮かぶ、木山島（きやまじま）という無人島である。地元では「キャマ」と呼ばれている島で、「木山」というのは後に当てられた字面と思われる。奄美大島にはキャンプのできる無人島が6つあるが、個人的には、この木山島だけが未だ上陸していない、唯一にして最後の島である。奄美在住の間に無人島の全てを制覇するという野望を成し遂げるためには、どうしても上陸しなければならない島でもあった。ちなみに奄美大島の無人島については、その一つひとつがWikipediaに掲載されている。木山島の詳細にご興味のある方は、Wikiにて「木山島」を検索されたい。なお、鹿児島県の奄美群島は、主要島である奄美大島の他に、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論

島から成るが、意外にもキャンプのできる無人島を有するのは奄美大島だけである。その理由はそれぞれの島の成り立ちを辿れば理解に難くないが、これは奄美大島に勤務する教職員としては備えておくべき知識である。まずはこの島に勤務できたことを喜ぶとともに、その運命に感謝したい。

研修の1か月ほど前に、船長に木山島への渡航を打診したところ、予期せぬ返事があった。そう、コロナとともに2021年を騒がせた、例の小笠原産の軽石である。好事魔多しとはよく言ったものだが、コロナが明けたかと思えば次のやっかい事が湧き上がる。船長曰く、軽石は日によって、まるで生き物のようである所に集積したり、かと思えば次の日には跡形もなく消え去ったりと、その日の風と波によって神出鬼没とのことであった。木山島に行けるかどうかは、船仲間と連絡を取りあって、最終決定は当日の情報次第とのことであった。そこで、もし木山島が渡航不可能な場合は、その日最も条件の良いオスメの別の島を紹介してもらえよう、船長にお願いしておいた。

令和3年11月20日(土)、朝8時半。

県内の公立高校でもっともラグジュアリーな奄高地下駐車場に集合とした。大谷の愛車カローラワゴン一台に乗り合わせて出発する予定だったので、まずは皆が自分の車から荷を持ち出して、それをカロゴンに手当たり次第に詰め込み始めた。しかし、想定以上に荷が多い。ただこれにはしっかりと思い当たる節があり、これは特に自分が欲張っていろいろなものを持参したことに起因する。無人島に着いてご飯を作ったり、テントサイトを設営したりし始めると、必ず「ああ、あれを持ってくればよかった!」「あれがあったら便利なのに!」といった事態に必ず遭遇する。その思いを感じながら不便を楽しんだり、いつも何気なく使っている道具のありがたみを再認識したりすることもこの研修の本質なのだが、一方でそんな思いをしてはなるものかと、あれらこれやと持参してしまう。たとえ自分が使わないものであっても、これを持っていったら仲間が助かるだろうとか、みんなが喜ぶだろうとか、そんなことを考えながら準備するので、結果、想定以上に荷物がかさ張るのである。

立体パズルゲームを攻略するように、カロゴンの荷台に隙間なく、手を替え品を替え積み込んでみたものの、どうしても入りきらない。たまりかねた前さんから「俺の軽(自動車)をもう一台出そうか?」という提案があった。ありがたいことだが、しかし、二台に分かれて行くという事態はどうしても避けたい。やはり、研修の目的の一つに「チーム奄高の結束力の向上」もある。そのためにはどうしても一台の車で出発し、無人島に着くまでの間に、メンバーの全員で島に着いたらこうしよう、おれはこんなことを考えている、といった他愛もない夢を語り合う行程が必須なのである。ルパンと五右衛門と次元がそれぞれ別の車に分乗しては、カリオストロの城は成立しないということである。車一台にすし詰めで出掛けるという行為自体に、乗り心地や燃費のうんぬんを考慮してなお上回る大切な意味があるのだ。

そこで急遽予定を変更し、大谷のカロゴンを諦めて、段さんの愛車である日産のプレサージュに乗り換えることとなった。さすがは8人乗りSUVのプレサージュである。前さんの釣り竿や大谷の銚などの長尺ものは後部座席の足元に置くなどして、無事に全ての荷を一台に積み込むことができた。仲間が多いとできることの幅も広がるものだ。

毎年恒例の、正門前で記念撮影に臨んだあと、名瀬を出発した。

古仁屋の港に着く。船長にお願いした出航の時刻までまだまだ時間があったので、海の駅のすぐ近くのボードウォークで時間をつぶす。ここのボードウォークは、道行く人がだれでも気軽に海中をのぞき

込んで、生き物を観察できるような憩いのスペースとなっている。色とりどりのイソギンチャクに数種類のクマノミ、ゆったりと泳ぐ大型魚を愛でていると、ふと、目の前に甲長 40 センチほどのウミガメが現れた。ウミガメは奄美大島では比較的良好に見かけるもので、はじめのうちは「アオウミガメの子どもか、気持ちよさそうに泳いでいるな…」と、何とはなしに眺めていたのだが、それにしても、どこか違和感がある。甲羅の色味が、いつも見慣れているカメと違い、やけに茶色みがかっている。甲羅の縁がなんだかギザギザで、顔の鼻先も尖がっている… まさかこれは！ IUCN（国際自然保護連合）で絶滅危惧 IA 類の CR（絶滅寸前種）に指定されている熱帯性のウミガメ、タイマイではないか！間違いのない！身近なところでいうと、鼈甲細工の原料として利用される、文字通りベッコウ飴の色をした、世界的にも希少なウミガメである！ ちなみに世界には 7 種のウミガメが生息しているが、そのすべてが野生生物の取引に関するワシントン条約においてもっとも規制の厳しい I 類に分類されており、その剥製はおろか、甲羅などの一部であってもその取引は禁止されている。タイマイはその中でも特に個体数が少なく、他のウミガメが銀のエンゼルだとしたらこいつは金のエンゼル級にレアな生き物である。自分自身も図鑑以外で目にしたのは初めてだった。研修を前に、何と幸先のよいことか…



船長がやって来た。毎年お世話になっているので、彼とは一年振りにあっても「ヘイボーイ。ロングタイム・ノー・シーだな。グッドニュースとバッドニュースがあるけど、どちらから聞くかい？」というくらいの間柄である。ちなみにさしたるグッドニュースはなく、船長から告げられたのは、「軽石が多くて、今日は木山島へは行けない」というバッドニュースのみだった。タイマイのご利益はどこへ行ってしまったのか、こればかりは謎である。

とにかく、木山島に代わるオススメの行き先をと船長に相談し、船代のことも考慮した結果、今年の研修地は加計呂麻島は北部の、「フルサト浜」という無人浜に決定した。ちなみに無人浜とはこの紀要での造語であり、その定義は「有人島と陸続きではあるけれど、船でしか行けない、無人島と同じ環境の浜」である。無人浜についての詳細は、ぜひ前々回紀要の、「天皇浜でよか余暇」を参照されたい。船長に、フルサト浜の「フルサト」の名の由来は何か、漢字では古里か故郷かと尋ねたが、昔から地元ではそのように呼ばれていて由来は知らない、どう表記するのも知らない、そんなことを聞くのはあんたがはじめてだ、とのことだった。

大島海峡の紺碧の海に一本の白い筋を描きながら船が進む。両岸は地形が複雑に入り組んだ、典型的なリアス式海岸の海峡である。リアス式海岸は別名、沈水海岸や溺れ谷とも呼ばれるが、今、奄美大島と加計呂麻島と呼ばれるこの二つの島は、今から一万数千年の昔、名もなき陸続きの一つの島であった。そのころは氷河期の末期で、海面は今より 100 メートル以上も低かったため、現在大島海峡と呼ばれるこの場所は、当時はその名もなき島の山間部にある谷間として、緑豊かな場所であった。その後、氷河期の終了とともに海面が上昇し、島の低地の部分であったこの場所に海水が流れ込み、今の大島海峡となったというわけである。見方を変えれば、海峡ができたことにより分断されてしまった二つの尾根の部分が島として残り、今では奄美大島と加計呂麻島と呼ばれている。大島海峡は両岸をその奄美大島と加計呂麻島という尾根の部分に囲まれているため、水面は穏やかで、そのため現在では養殖業が盛んであるし、台風時には大型船舶の避難場所としても利用されている、天然の要塞である。

島の成り立ちを更に大きなスケールでさかのぼれば、数百万年前は、奄美大島はユーラシア大陸の一部であり、そこから海面の上昇や地殻変動を経て、今の場所に落ち着いた（と言っても、もちろん今でも人間の時間軸では感じる事ができないだけで、現在進行形で地殻変動は休むことなく続いている）。よく、奄美大島に希少な生物が息づいていることに焦点をあてて、世界遺産とも絡めて「東洋のガラパゴス」と紹介される場合があるが、これは全くもってナンセンスである。ガラパゴスも奄美も、世界的に見て希少で固有の生物が多いことに間違いはないが、その成り立ちが全く異なる。本家ガラパゴスは、海底火山の活動により、大洋の中に突如として島が出現し、その何もない土だけの島に少しずつ植物が根付き、動物がやって来て、出来上がった島である（このようにして固有化した種は、「新固有種」と呼ばれる）。一方、我々が奄美大島（奄美群島）は、先に述べた通り、もともとはユーラシア大陸の東海岸の一部であり、そこから分離、移動して今の形となった。今では固有種となったアマミノクロウサギやルリカケスも、もともとはユーラシア大陸東部の広範囲に生息していた普遍的な種であった。奄美大島が大陸から分離されてからも、大陸と奄美大島のどちらにもクロウサギたちは生息していたのだが、その後、大陸部の集団は、捕食されたり局地的な寒冷化など環境の変化の影響を受けたりして死滅してしまったのだが、奄美大島の個体群はまわりに大型の肉食哺乳類がいなかったことや、島が温暖な黒潮の海に囲まれていたことによって棲みよい環境が確保されたことが幸いして、生き残ったのである。つまり、ユーラシア大陸東部に広く分布していたクロウサギやルリカケスは、奄美を残していなくなり、奄美の個体群は気づけば相対的に固有化してしまった、という次第である（このようにして固有化した種は、新固有種に対して「遺存固有種」と呼ばれる）。繰り返すが、ガラパゴスと奄美大島は、固有種の宝庫という点では似るものの、その成立の過程はまったく異なる。奄美の自然の豊かさにあえてキャッチコピーをつけるとすれば、ここは東洋のガラパゴスではなく、「東洋のノアの箱舟」なのである。

フルサト浜に到着。気持ちの良い天高く馬肥ゆる秋の空が広がり、青い海と白い砂浜が眩い。船上からバケツリレーにて荷を降ろし、船長と「また明日」とあいさつを交わす。船長は毎度、自分たちを下船させたらあつという間に戻っていく。船のエンジン音が消え去るとそこには波の音と風のそよめきしか残らない。まるでついさっきまで、船で海原を切り裂いて走っていた自分が夢の中であったかのようだ。いつも感じる、無人島に上陸直後の不思議な感覚である。



荷物を浜の一か所にまとめて、とりあえずはみんなでそろって浜の踏査に入る。浜を端から端まで歩いて形状をつぶさに観察し、どこにどんな岩場があって、日陰がどれくらい確保できて、潮はどのあたりまで満ちてくるのだろうか、頭の中に入れ込むのである。それらを総合的に勘案して、ここの生活で本拠地とする場所、つまり焚火を起こしてゆったりとする場所を決めるのだ。おのずと、個人個人のテントはその周辺に張ることになる。一晩限りの、リアルなシムシティ™ の開始である。

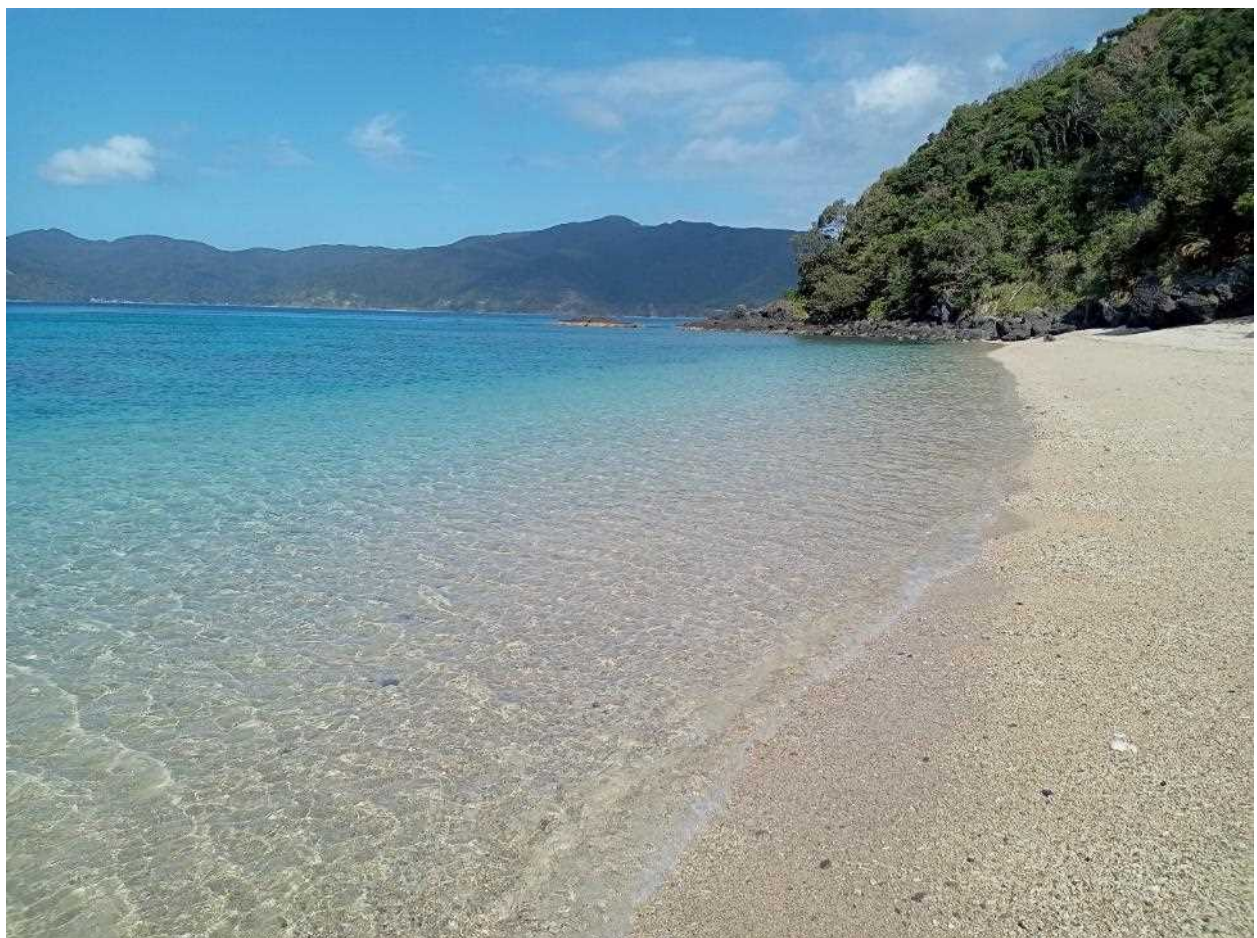
このフルサト浜は、ぜいたくな浜だった。分かりやすく言うと、無人島研修5回目にして、最高に遊びやすい浜であった。まず、浜の奥行きが広いので、満潮時であっても活動できる余地が十分にある。浜の背後地には適度な窪みがあり、風をしのげる場所もある。ガジュマルをはじめとした大木の枝が浜の上まで張り出しており、日中は日陰が確保できる上に、夜は上からランタンを吊るすこともできる。

そんな場所が2・3か所も見つかり、どこを拠点にするか選択に迷うほどだ。最後はそれぞれの場所の砂の具合を観察して(これが場所によって全く違うのである)、砂が一番細かくてふかふかした、浜の東端の好適地をベースにすることにした。

次に行うのは、二日分の焚火を満喫するための、薪の確保である。四人で総延長400メートルの浜を歩き回り、浜に打ち上げられた流木を集めまわった。ちなみになぜ400メートルだと分かるかというと、Googleマップの距離測定で、正確な距離がその場ですぐに調べられるからである。「無人島」には、文明から隔絶された自然のみが支配する孤島、というイメージがあるかもしれないが、よくよく考えれば周りに遮るものがない洋上に浮かんでいるので、実のところ有人島から飛んでくる携帯の電波の受信状況はきわめて良好である。困ったことに、無人島ではYouTubeでもNETFLIXでも見放題、アマゾンでも楽天でも注文し放題なのである。

薪を集め、テントの設営を終えたら、必然的にすることは決まっている。そう、待ちに待った乾杯である。作業後の喉の渇きとともに、気の置けない仲間たちと、そしてこの美しくゆったりと時の流れるロケーション。この後も、明日の昼までフリープランかつノープランな自由な時間である。このシチュエーションで飲むビールの旨さは、あえて言葉に換える必要もない。

大谷が、さっそく海に潜りに行った。ひとしきり海の中を観察したあと浜に上がってきて、銚子を手にして再び海に消えた。ふと、どこからともなく軽やかな音色がすると思ったら、段さんがテントの中でギターをつま弾いている。前さんは、待っていましたとばかりに太公望と化し、それぞれが気ままな時を楽しんだ。



前さんの竿にヒットがあった。第一号に掛かったのは、その名も正式名をオジサンという魚である。口元に、海底の砂の中の餌を探すためのヒゲのような器官を持っているためその名がついた、白身で淡白な高級魚である。なかなかの大物だったこともあり、オジサンの周りを浮足立ったオジサンたち四人が取り囲んで、オジサンのオジサンによるオジサンのための釣りだーと騒ぎ始めた。前さんはこの他にもアカヒメジ、ヒメフエダイ、オビブダイ、それにトラギスとヒトスジモチノウオを二匹ずつを釣り上げた。しかも、どの魚もサイズが大きい。というより、大きなハリに、しかも餌にキビナゴをつけているので、はじめからそれを丸呑みできる大物狙いなのである。奄美に赴任してから「No Fishing, No Life.」を座右の銘とするようになった前さん曰く、無人島の魚はスレていないからよく掛かる（気がする、いや、ひょっとしたら僕の腕かもしれないが）、とのことだった。つまり、無人島の魚は普段から釣り人を相手にしていないので、警戒心が弱くエサへの食いつきが良いらしい。

いつの間にか日は傾き、晚餐の時間である。大谷がたくさんの貝を採ってきてくれた。彼はいつも海に潜ったり、岩場を歩き回ったりしてはたくさんの貝を抱えてきてくれる。貝は茹でても旨いし、焼いても旨い、現地調達ならではの食材である。前さんが魚を捌いて、準備してきた粉末の昆布だしで、鍋を作ってくれた。釣り上げた魚は全てが白身で、これがまたふっくらと、最高に旨い。全ての食材は余すことなく、全ていただいた。段さんがギターを持ち出し、リクエストすれば大抵の曲を弾いてくれるので、波の音しかなかった浜に音楽が加わって、四人で大いに盛り上がった。

そうして、無人島の夜はあっという間に更けていく。



朝。ぐっすりとした眠りから、「ヒュンッ」という竿のしなる音で目が覚める。おもむろに時計を手にすると、もうすでに9時を回っている。エアウィーブ®にマイまくら®の組み合わせかと思わせる程のふかふかの砂の快適さに、こんな時刻まで眠らされてしまったようだ。テントの幕を上げると、前さんが水面に浮かぶウキに目を凝らしている姿が見えた。そうだ、みんなの朝食を作らねば。

実はこのところ、ホットサンドにはまっている。自分が愛用しているホットサンドメーカーは、ニクロム線内蔵の家電のものではなく、いわゆる直火タイプのものである。こちらはバウルーというブランドのものが老舗で有名だが、自分が愛用しているのはCHUMS（チャムス）というアメリカのアウトドアメーカーのものだ。購入前に、意外にも日本製ということが分かり、これも購入を後押しした。ホットサンドが焼き上がると、パンの表面に「CHUMS」のロゴがきれいに焼き色で現れて、その反対の面にはブービーバードという、CHUMSのカツオドリのキャラクターが現れる。何度となく金型の試作を行い、誰が扱っても上手く焼き目が付くように工夫されていることが伝わってくる完成度だ。これを購



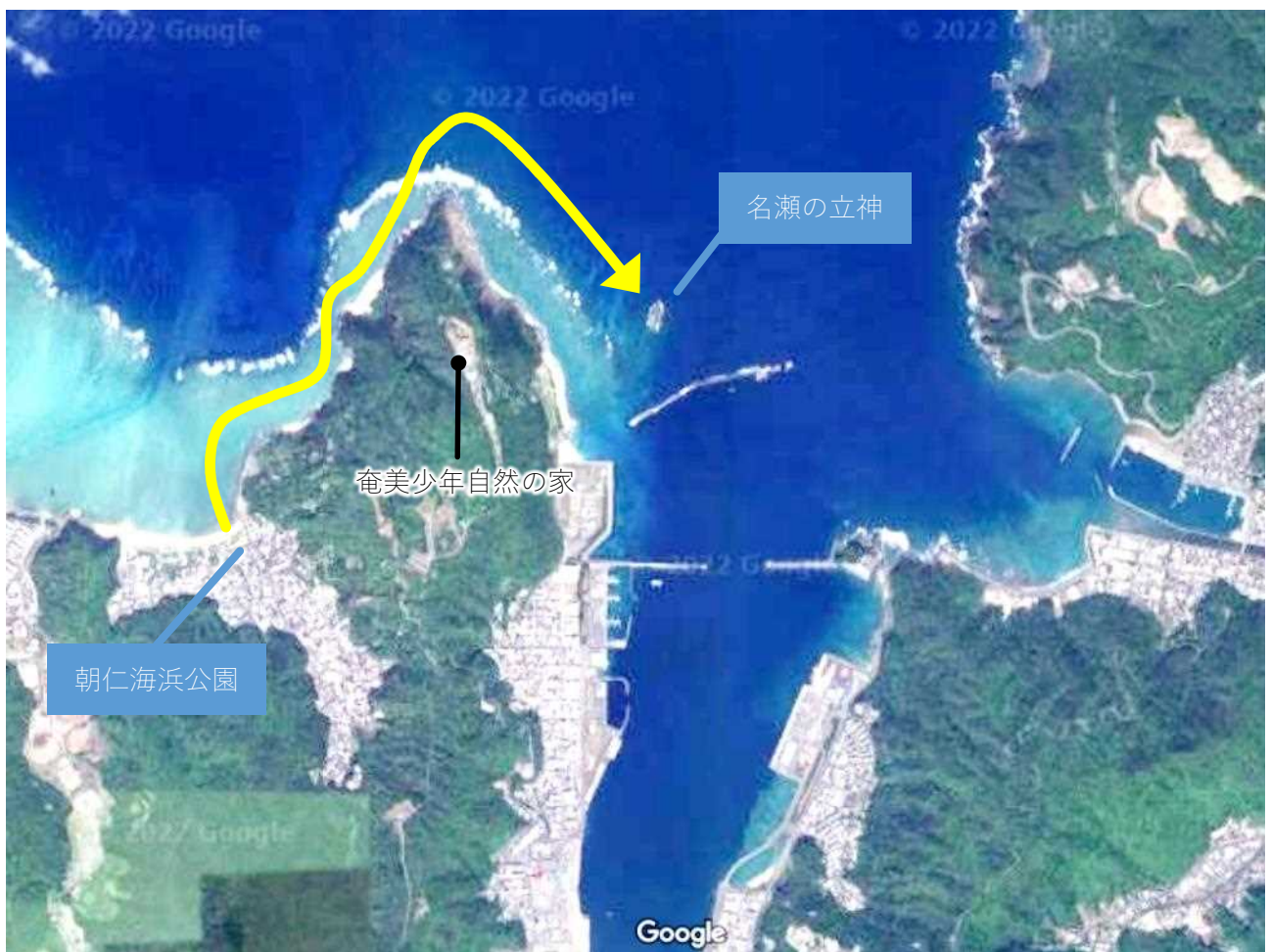
入する前は、「焼き目であれ、ブランドのロゴを食するなどいかなものか」と思っていたが、意外にも、きれいに焼き上がったロゴを見るとアウトドア感が増して、気持ちも何だかワクワクしてくる。もちろん、子どもたちにも大好評だ。もう一つ、ホットサンドの魅力は「パンの耳までおいしく食べられるようになる」ことも大きい。一般的に嫌われもののパンの耳も、ホットサンドの魔力に掛かれば、カリカリと、本当においしい部分に激変する。ホットサンドを作ったことがない、という人には、この点も特にオススメしたい。

今回のホットサンドの具は、シーチキン®とぶつ切りにしたカマンベールチーズを和えたものだ。前日、船に乗る直前に、乗り場のすぐ近くにあるAコープせとうち店で最後の買い物をした際、目に付いた旨そうなものを適当に手に取っただけである。先に言うと、今回ホットサンドを振る舞った三人には申し訳ないが、このチョイスは微妙であった。素材それぞれの潜在力に疑いの余地はないが、いかんせん実際に頬ばってみると、そもそもツナにカマンベールの臭みがミスマッチで、しかも温めたことにより、そのカマンベールの臭いがさらに強調されている。料理の上手な人は素材の相乗効果を引き出し、素材それぞれの持てる力の「1+1」を3にも4にもできるのだが、今回の味は、ツナの旨味1+カマンベールの旨味1の和が普通でも2にならなければならない所を、せいぜい1.5くらいであった。無人島というロケーションがなんとか0.5を加味してくれ、当たり前の2を確保している、そんな感じだ。前もってホットサンドの具を何にするか決めていないから、無人島にきて「ウナギ+梅干し」に準ずる食べ合わせを発見するという失態をするのだ。救われたのは、三人が、慮ってか美味しいと言ってくれたことだった。

風もほとんど吹いておらず、海面は池のように穏やかである。まさに、絶好のSUP（サップ）日和である。ちなみにSUPと聞いても、まだまだ認知度も低くて何だそれはという方もいると思うが、SUPとはStand Up Paddlebord（スタンド・アップ・パドルボード）の略で、まれにテレビCM等で見かける、サーフボードの一回り大きいやつの上に立った人がパドル1本で大海原を漕いでいて、いかにも俺（私）イケてるでしょ、感満載のあれである。これに関しても、前号にて「私はSUP仲間が欲しいのです。」と告白したが、実は嬉しいことに、その後職場にて同志が増えたのである。一人は地歴公民科の教諭にしてミュージシャンでありサーファーの櫻井と、もう一人は同じ工業科の教諭にして現役の剣士である緒方である。ちなみにこの二人に関しては、自分がSUPの購入を勧めたというわけではなく、それぞれが知らぬ間に自発的にSUPのオーナーとなっている。生物学では、もとは異なる出自でも同じ環境に身を置くとだんだん同じ形になっていくという現象を「収斂（しゅうれん）」というが、つまり海で暮らすうちにサメとイルカの姿が似てきたように、我々も奄美で青い海を眺めるうちに、最後はSUPの購入という結果に収斂したということだ。三人が、世間話のタイミングで互いにSUPの所有者であったことを知るのに、そう時間はかからなかった。そして三人で、SUPで一緒にどこかへ遠征してみよう、ということになった。そんなもの、一人で行けばいいじゃないか、と思われる方もいると思うが、やはり安全上の理由からそれは慎むべきである。洋上という、社会と隔絶された世界に一人で飛び込み、万が一にもSUPがパンクして溺れたり、思いもよらぬ風に流されて遭難したりしてしまっただけで、多くの人に迷惑を掛けると同時に命に直結する危険があるからである。「植村直己は単独行だったぞ！」といわれても、彼にはそこに「死して然るべし」という信念があった。もっといえば、彼は自分の死に場所を求めて世界を彷徨っていた（と思う）。自分にはそんな高尚な考えはないし、むしろまだ死ぬ訳にはいかぬ。危険を伴う場所へは、有事の際の助け合いを想定して複数人で行くことが鉄則なのだ（ということにして、この無人島研修にしても、決して寂しいから一人ではいけないことの理由とする）。

SUPで遠出するというのは初めての経験であったので、できるだけ近場で何か物語性のある目的地はないかと考えていたところ、良い案が浮かび上がった。奄美高校からも見える、名瀬港にポッカリと佇む「名瀬の立神」に、直接参拝に行ってみるというプランである。

体育祭の振替休日となった9月6日（月）、午前10時。大冨、櫻井、緒方の三人は、朝仁海浜公園に集合した。出発地点をここに決めたのは、立神まで片道3キロと程よい距離にあることに加えて、何より公園にトイレと水道があるので、戻ってきてから水を浴びたりSUPの塩を洗い流したりできることである。出発前に、最後の天気予報をチェックする。この日に決行しようとした一昨日の予報から変化はなく、風速は1メートル、日陰のない洋上で活動するには最適の薄曇り。まさしく、立神様が「気を付けておいでなさい」とお膳立てしてくれたような、最高のコンディションだ。3人でそろってSUPをポンピングし、これを準備運動に代える。防水バッグの中に、アクシデントに遭遇した際に「海のもしもは118」するための携帯電話と、命の次に大切な飲み水を余分に詰め、SUPのバンドに括りつける。ここから奄美少年自然の家が建つ赤崎の岬をぐるりと時計回りにたどって、そこから名瀬湾に浮かぶ立神を一直線に目指すルートである。



朝仁海岸から、三人そろっていざ出発！ SUPは比重が小さいので喫水も小さく、つまり抵抗が少な



三人の所有する SUP は、ポンプで膨らませる（インフレーター）タイプ。メリットは、軽量なことで、折りたためるので保管に場所を取らないことである。SUP にはレース用のモデルや釣り仕様モデルなど、様々なタイプ、ブランドがあるので、購入を検討される際はぜひ気軽に相談してほしい。

いので水面にパドルを突き刺してゆっくりと後ろに引くだけで、滑るように海面を進む。自転車と同じで、一度動き始めると安定性も増し、あとは惰性で進んでいくので体力もさほど消耗しない。ただし、もちろん転倒しないように常に踏ん張ってバランスをとっているの、体幹は相当に鍛えられる。SUP は、遊びながらシェイプアップもできる、最高のギアでもある。水は透き通り、色とりどりの、様々な姿をしたサンゴを海面に見下ろしながら進めば、まるでどこか雑多で混沌とした夜の街の上を飛んでいるかのような、そんな錯覚に見舞われる。右手にそびえる朝仁墓地の物置小屋の、海に面した側の壁に、大きな菩薩の絵が描かれていた。こんなことも、小屋を海側から眺めることができたからこそその発見である。お、目の前にウミガメだ！こちらの存在

に気付くや否や、ものすごいスピードで逃げていく。やはり観光地で人に馴れているカメとは挙動が異なる。

まだ全く疲れるような距離は進んでいないが、出発前に第一休憩地と決めておいた貝浜に、計画通りに上陸する。ここでは、とりあえず SUP を漕ぎ出して気付いたことなどを互いに共有し合う、ミーティングの時間も兼ねている。全員が、不調や困りごとはないようだ。喉が渇きを感じる前の早めの水分を摂り、再び海に繰り出す。さて、ここからが、この冒険最大の難所である。今の時代は便利なもので、未だ足を踏み入れたことがない場所であっても、Google マップで高解像度の航空写真を見ることができるので、今回の挑戦についても、この赤崎の北端がどのようになっているかは、事前調査のうえ頭の中に叩き込んである。航空写真を見て、例えば海の領域であれば、エメラルドグリーンに映えた場所は珊瑚礁の、いわゆる「礁池（珊瑚礁の内側で、波の穏やかなエリア）」と呼ばれる部分であり、底が白い砂地の場所である。その礁池の中に点在する黒い影が、岩もしくは珊瑚。そして深い群青の場所が、いわゆる「礁外（珊瑚礁の外側で、深く、外洋から



の波を直接受けるエリア)」。そして、礁池と礁外の境には白い波が筋のようにつながっており、「礁嶺」という、天然の防波堤を形成している。珊瑚礁とは、その環境そのものがまるで一つの生命体であるかのように振る舞い、自分たちにとって住みよい、波の穏やかな環境を自ら創り上げた、壮大な自然の造形美なのである。つまり珊瑚礁の内側では、沖の方へ行けば行くほど次第に水深は浅くなり、その一部が海面上から顔を出し、天然の防波堤を築いている。今は礁内から立神のある礁外（外洋）に出るために、この部分をどうやって SUP で通り抜けるのか、それが最大の難関であった。



白波の立つ礁嶺を前に、どうしたものかと思案に暮れる櫻井

礁嶺に近づいて、様子を確認してみると、その防波堤のように隙間なく隆起したサンゴの、ある一定の間隔ごとに、所どころ、まるでモーゼが切り開いたかのような、サンゴが何も存在しない隙間がある。その幅は実に 50 センチか 1 メートルそこらで、距離にして数メートル。ははあ、珊瑚礁はこの隙間で潮流の一部を外と内に出し入れすることによって、外洋から礁嶺が受ける水圧をある程度小さくしているのかもしれない。とにかく今は、このわずかな隙間を SUP でまっすぐに通り抜けねばならない。ただし、話は簡単そうに見えて、そうはいかないのである。まずその 1 メートルに満たない隙間の両側には、鋭く尖ったサンゴが密集している。それに勢いよくぶつかろうものなら、大切なサンゴを傷つけてしまう上に、そもそも SUP に穴が開いてパンクしたあげく、この冒険自体が続行不可能になってしまう。つまりはひと昔前に一世を風靡した「電流イライラ棒」の遊びじゃないバージョンなのだ。そこにきて、沖からの不規則に打ち付ける波である。SUP の上に立つだけでも不安定だというのに、襲い来る波を予測しながらその一つひとつに対処しつつ、左右をサンゴで擦らぬように舵を取りながら、一気に駆け抜けなければならない。

三人はそれぞれに散り、自分が挑むべき礁嶺の間隙を見つけて、それに果敢に挑んだ。自分は…！ うまく切り抜けることができた。櫻井は… 50 メートル程離れたところで、無事に切り抜けたようだ。振り返って、続く緒方は…!? 南無三、波にバランスを崩されてあえなく沈、呆然と礁嶺の岩の上に立ちつくすこととなった。

気を取り直して、三人で赤崎の北端を抜けて外洋へと飛び出す。遠く名瀬湾の洋上に、立神が見える。外洋に出たが、といってもこの日は風も波もない、まるでプールのようなベタ凪だ。運がいいというよりも、しっかりと天気予報を確認し、それに合わせて決行した計画の賜である。ここからは、一直線に立神を目指すだけだった。パドルを漕ぐたびに、立神の姿が、迫り来るとい言葉がびったりなほどぐんぐんと大きくなってくる。

そして、立神に到着したとほぼ同時に、奇跡が起こる。天気予報によれば今日は一日曇り、であったが、なんとそれまで空一面を薄く覆っていた鉛色の雲が消え去り、急に陽が差し始めたかと思うと、空が海と同じ色に、真っ青に晴れ渡ったのである。紺碧の海に、真っ青な空。全てが青の支配する世界とは、こんなにも美しいものかと、しばしその情景にうっとりときを忘れてしまうほどであった。ふと、遠くに浮かぶ櫻井の方を見ると、なんと SUP の上に横になって、静かに目を閉じて寝ているではないか！ そうか、この大自然のエネルギーを余すことなく全身で吸収するには、その場で眠るということこそ、相反するようになって実はどんな行動をも超越する反応なのか。さすが、余暇の楽しみ方を知っている人間は違う。思えば以前、枝手久島でキャンプした際も、除川（という真の遊び人）は島に着いてすぐに、他のメンバーが浜の散策に出掛けるのを尻目に、一人で砂浜の真ん中に大の字になって、グー

ゲーと寝息を立てて熟睡していた。それを見て、そんな行動をとれる人に驚くと同時に、羨ましいと感じたときのことを思い出す。

立神の御加護に満たされ、十分に楽しんだところでそろそろ戻ろうかという話になった。とたん、先ほどまで晴れ渡っていた空に雲が立ちこみ始め、天気予報の通り、再び薄曇りの気配となった。立神を参拝している間だけ美しい晴れ間が広がるなど、よもや偶然とは思えない、ありがたい時間であった。三人にとって、この上ない奄美での思い出となった。



閑話休題。

話を無人島に戻す。

その SUP に乗って、断崖絶壁に阻まれて歩いていくことができない隣の浜に行ってみる。隣の浜はどんな様相の浜なのだろうか、はたまた無人島生活をより快適にするための漂流物が打ち上げられていないか、その調査と回収が目的だ。隣の浜までは、SUP で5分ほど。波打ち際の奥に、比較的新しい、樹脂製の大きなビールケースが打ち上げられていた。日本のビールケースはたいてい黄色だが、これは落ち着いたカーキ色で側面には英字があり、インテリアとしても使えそうなおしゃれな感じのものだ。ひっくり返して SUP の上に乗せると、ちょうどいい椅子になった。このスタイルで SUP に乗るのは初めてで、立ちっぱなしよりも疲れずにいい具合である。フルサト浜に持ち帰ると、前さんが砂浜に立ったまま釣り糸を垂れていたのでもっと釣果が上がりますようにと、プレゼントした。

撤収の時刻が、あっという間に迫ってきた。船長のお迎えの時間が、13時。よって、12時になった

ら、みんなで撤収作業に入ろうと決めていた。各自、テントを畳み、手が空いたものはそれを手伝う。ベースキャンプから200メートル程離れた船着き場所まで、どの荷物がだれのものとか気に留めることもなく、目に付いた荷を何度も往復しては、みんなで黙々と運んだ。こういう時、さすがは、小学生では成立しない大人のキャンプなのだと再認識する。船長の船は、定刻きっかりに到着。船に乗って驚いた。



甲板の隅で、1メートルはあろうかという大きなロウニンアジ（通称、GT）がビチビチとび跳ねている。船長曰く、「今ここで釣れた」とのことだった。欲しければやるぞ、と言われたが、持って帰るすべがない。刺身にしたら何十人前だろうかなど思い浮かべながら、気持ちだけをありがたくいただいた。

今回の研修も、実に充実したものだだった。この研修では、毎回、これまで行ったことのない未知の浜で活動する、ということが大義としてきたが、どの浜も魅力的で、一つとして同じ浜はなかった。奄美大島の観光地でいえば、土盛海岸と嘉徳ビーチとホノホシ海岸のそれが、全く異なるのと同じである。個人的に、奄美での残された時間はもうあと少しだが、それでも、可能な限り、まだまだ足を踏み入れていない自然に飛び込んでいきたいと思っている。

ただ最後に、ここである告白をしたい。今しがた言ったことに反するようだが、じつはこの紀要の執筆を通じて、困ったことに、なかなか筆が進まなかった。なぜだ、なぜこんなにも美しい浜で、こんなにも楽しい時間を過ごしているというのに、それを表現する次の言葉が出てこない、という苦悩である。しかし、こうなることは、じつは筆を執る前から薄々感じていた。いや、どこかでそれを認めないようにしながら、ペンを走らせた。そう、そうなのだ。自分にとって、奄美大島というこの世界遺産の島で遊ぶということが、美しい自然と接するということが、もはや当たり前の日常となっている。その日常の中で、自然に対しての感度が鈍ってきているのか、以前は無尽蔵に湧き出していた美しさに素直に感動できる心の泉が、このところ枯渇しかけているのである。こんなに無垢できらびやかな島でキャンプをしても、次に起こる未来は予定調和のそれであり、加えて4度目の無人島忌憚の執筆ということもあり、もう無人島でのキャンプの様子は書き尽くしてしまった感もある。本紀要は隔年発行であるので、過去4回にわたって連載してきたこの「無人島でよか余暇」も、勤務年数から考えるにこれが最後の寄稿となる。

紙幅のことも気にしなければならないし、なによりこういった文集には原稿の締め切りというものがある。まだまだ書きたいことはあるが、最後に、私が後進のお役に立てることがあるとすれば、このすばらしい研修の伝統を、私が転勤になった後も連綿と続けてくれる有志への引継ぎくらいである。これから無人島でキャンプしてみたいと思いついた方は、「入門 ～はじめての無人島～」について、島の選び方、渡航方法から持参品、注意すべき点まで、遠慮なく私に聞いて欲しい。ただ、それだけである。